

学力向上に効果のある取組事例

大分大学教育学部附属小学校

⑰校内研修などによる授業改善

取組の具体

1 全ての授業の土台となる学級経営の徹底

○学級に受容的な雰囲気や聴き合う風土が構築され、児童が安心して授業に臨めるよう学級経営（フリートーク、ほめ言葉のシャワー、価値語、成長ノート）を校内研修に位置づけ学校全体で取り組んでいる。

2 学級経営の土台の上に、組織的な授業改善の取組を構築する

○学校全体で取り組む学級経営4つの取組を土台に、校内研修ともリンクさせながら授業研究を行っている。校内研修では、年間18本の授業研究会の後は事後研を行ったり、年間4～5回の外国語スキルアップ研修やICT活用研修を行ったりして教員全体の指導力向上につなげている。

○新大分スタンダードの要素を含めた「授業観察シート」を用いながら、年間一人最低2回、指導教諭等による授業観察を行い、その都度指導（事後研）を行っている。また、授業の結果を数値化し、目標管理シートにも反映している。

○「学び合いの授業」を校内研究に位置付け、希望する教科・領域について、グループを作り、ファシリテーターを中心に、学校や学級の実態から課題を見出し、互見授業等を行い、授業改善につなげる。

3 資質・能力の育成をめざし、文部科学省や大分県教育委員会の指導をふまえた授業改善を進める

○学習指導要領に基づき、付きたい力（資質・能力）を明確にした授業を日常的に行っている。

○県の改善の重点を基に、本校での各教科・領域の授業改善を図る取組を考え、実践をしている。また、年間12回、文科省の調査官や県の指導主事を招聘し、授業等について指導・助言をもらっている。

○全国学力学習状況調査の結果を、全国の国立小学校と比較し、目標値等を定めている。結果の公表後、指導教諭の分析を基に、継続して取り組むこと・授業改善が必要なことを全教職員で共通理解した後に、実際の問題を全員で解いて日々の授業改善につなげている。

○内容ベースでなく、資質・能力ベースで編成したカリキュラムをもとに授業を展開している。年間通してその見直し（カリキュラム・マネジメント）を行い、教科横断的に指導事項を関連させて効率よく指導している。また、単元を通して付けるべき資質・能力や学習内容を捉えて授業を進めている。

4 全校で取り組んでいる「外国語」「生活・総合的な学習の時間」の知見を、他教科にいかす

○外国語科や外国語活動、総合的な学習の時間など、目的意識や相手意識を明確にした単元構想を確実にしている。総合的な学習の時間における探究サイクルを、各教科の単元構想に活用している。

5 どの教科においても日常的に情報を活用した言語活動に取り組む

○研究テーマに「情報活用能力の育成」を掲げ、日常的に情報活用を意識して授業を行っている。

○自分の考えだけでなく、友達の考えを説明する場（対話的学び）を多く設けている。

○国語で出題されたような情報を収集しパンフレットを作成する学習やインタビューから分かったことをまとめて伝える学習を、各教科だけでなく、特別活動・総合的な学習の時間において日常的に取り組んでいる。

大分大学教育学部附属小学校 授業観察シート

令和6年度

日時	学年	年	組	授業者	教科等	外国語活動	指導教諭	
研究テーマ		グローバルリーダーに求められる確かな学力の育成 ～情報活用能力の育成～						
新大分スタンダードの視点	重点選択 A1つ B2つ	評価の観点例					自己評価 0.5割み	指導教諭 0.5割み
	主に重点選択に対する指導助言(指導教諭等)							
A 授業構想	評価規準	<ul style="list-style-type: none"> 評価規準は学習指導要領を踏まえて設定できているか。 具体的な子どもの姿で評価規準を設定しているか。 本時のねらいは適切に設定できているか。 						
	単元構想 教科横断的視点 教材開発	<ul style="list-style-type: none"> 他教科との関連を意識した単元構想をしているか。 他教科で付けた力が発揮される展開になっているか。 1人1台端末を積極的に活用しようとしているか。 						
	問題解決的な展開	<ul style="list-style-type: none"> 学習の課題は単元全体を見通しているか。 日常生活や既習事項との関連など子どもの学が意欲を引き出すものであるか。 適度な困難さや必然性が有り、達成感や成就感を得られる展開であるか。 単元や題材など内容や時間のまとまりを見通した単元の指導計画を作成しているか。 						
B 授業展開	めあて課題	<ul style="list-style-type: none"> めあては子どもと共有されており、見れば本時に何をすることが分かるか。 必然性や解決に向けての見通し、視点、手立て、条件等が具体的であるか。 課題や発問は焦点化されており、本時のねらいに迫るものであるか。 						
	まとめ振り返り	<ul style="list-style-type: none"> 課題に対応した適切なまとめとなっているか。 習得した学びを振り返ったり、次時への学びを意識したりできる内容になっているか。 振り返りの視点を与えているか。 						
	時間配分設定 ファシリテーション	<ul style="list-style-type: none"> 学習過程における時間配分は適当か。 教師がしゃべりすぎでないか。動線や声かけ等は意図的か。 						
	板書 教材・教具	<ul style="list-style-type: none"> 論理的に思考できるように比較や関係付け等の工夫をしているか。 子どもの思考の流れに沿った板書や板書の工夫をしているか。 ICT(1人1台端末を含む)やホワイトボード、掲示物等の教材・教具を効果的に活用しているか。 						
	きめ細かな指導	<ul style="list-style-type: none"> 習熟の程度を掴むための工夫をしているか。 特別な支援が必要な子どもへの支援を工夫しているか。 C評価の子どもを中心に子どもの思考や困りなどを適切に予測、具体的な支援をしているか。 個別最適な学び、協働的な学びを授業作りの視点に入れているか。 						
	自己存在 自己決定 自己表現	<ul style="list-style-type: none"> 子どもの思考する時間を確保しているか。 子ども自身で決定する場を設定しているか。 子どもの困りや気づきなどの思考の流れを生かしたり関連付けたりしているか。 						
共通の人間関係	<ul style="list-style-type: none"> お互いの意見を聞くとする場や信頼関係を築いているか。 自分の意見を言いたくなる工夫や仕掛けをしているか。 ペア学習やグループ学習の目的や内容は適切か。 							
評価	自己評価区分	評価平均	学びや振り返り・更なる授業改善に向けて(授業者)					
4	十分満足できる	自己評価	一昨年度より、「中間指導」の在り方を課題とし、授業改善を図ってきた。本授業の中間指導においては、既習表現や語句の選択技を広げることを目的に「①子どもの困りの共有」②おすすめの既習表現の共有」を行い、基本的表現の定着を目的に「③ALTからのアドバイス」を行った。①において、どの表現を使うか選択、自己決定させたことや、直後に困りを持つ子どもに発語させたことが、子どもたちのより主体的に既習表現を使うようとする姿につながった。しかし、全員が困りに対して既習表現や語句を考えるためには、ペアで考えを出し合う時間を設定するなど、自分の考えを持たせるための手立てが必要となると助言を頂いた。困りを自然に出せたり、一人の困りをみんなで解決しようとする教室の空気がベースにあることも改めて大切であると感じた。中間指導の在り方は確実にレベルアップしており、外国語活動以外の授業でもその考え方は生かされているように感じている。これからの授業改善に向けては、よりよい中間指導の在り方を考えていくと共に、より子どもたちが必然性と自信を持ってやりとりや発表ができるための手立てを模索していく必要がある。					
3	満足できる							
2	標準である							
1	やや不十分である							

